公開講座（総合科目「経済・企業 Ⅲ・Ⅳ」）

産業と人間

拓殖大学

目次

二一世紀の先端材料 ―セラミックス複合材料― ……坂田　勝　1
経済・効率 ―企業の論理と公益・倫理― ……森　隆亮　9
極限で私を支えたもの ……小野田寛郎　21
世界が変わる ―二一世紀の展望― ……櫻井よしこ　37
創業と成功の条件 ……横川　端　55
成功の秘訣 ……佐藤忠志　71
デフレ不況を生き抜く ―困難な時代を勝ち抜く経済人の発想と生き方― ……村田博文　83
『お金の話し』あれこれ ―我々の貯蓄の行方は― ……米澤潤一　99
無　題 ……渡辺裕之　117
一人の役人がこの国に思うこと ……藤田昌宏　131

あたたかい介護をするために〝一秒の重さ〟……石川牧子 147
小泉政権で日本政治は再生するか……松本　斉 167
我が国の危機管理……志方俊之 181
日本の政治はどうしたらよくなるか……清宮　龍 205
新しい時代の外食産業／実践的経営講座「『外食王』への道」……中島　武／西川りゅうじん 217
二一世紀の魅力と活力にあふれる日本……樋口廣太郎 235
正論を生きる……佐藤欣子 249
新世紀を拓く日本文化……竹本忠雄 263
学者としての歩み五十年 ―ハワイ・アメリカ・日本―……ジョージ秋田 273
最近の銀行 ―再編と統合の動き―……早川淑男 285
環境経営、コンプライアンス経営そして持続可能性経営 ―企業を変えるISO 14001の思想―……森　哲郎 297
人間信頼の教育……小林末男 311
アジア、アフリカの留学生を支え続けて三十年……東　文子 329
テロ戦争と日本外交……森本　敏 343
二一世紀の印刷産業について……北島義俊 361
回想　テロリズムとの戦い……アルベルト・フジモリ 375

『お金の話し』あれこれ

―我々の貯蓄の行方は―

米澤潤一

今日の演題は「お金の話し」ということで、お金にまつわるいろいろなトピックスをスライドを見ながらお話ししたいと思います。

だいぶ古い話になりますが、今から一〇年ぐらい前、一九九一年一二月二一日にソ連邦が崩壊し、大混乱を極めておりました。そのひと月ほど後ですが、九二年一月末に、崩壊した旧ソ連地域に対する西側諸国の援助をどうしたらいいのかということを相談するために私はヨーロッパ各国を回っておりました。政府の人に会うだけだと日本からお金をどうやって引き出すかという話しかしないもんですから、本当の話は民間のシンクタンクのような方に伺うのがいいなというので、フランスの国際戦略研究所の所長をしておられるDさんという非常に有名なソ連の研究家のところにお話を聞きに行きました。

そうしましたら、よく来てくれた。ソ連が崩壊したというのは大変なことなのだ。あの人たちは資本主義とか市場経済とかマネーサプライとか言葉はいっぱい知っているけど、その中身は全く知らないんだよ。自分は、ある国（これはベラルーシらしいんですが）の経済顧問をやっている。久しぶりに顧問会議に出てみたら、向こうの政府高官がうれしそうな顔をして、Dさん喜んでください、いよいよ我が国の資金不足もこれで解消することになりました。そんなに簡単に解消するはずないのに、なんでかと聞いたら、このあいだカナダから印刷機器メーカーの人が高性能のカラー印刷機を売り込みに来た。これさえあれば我が国の資金不足は解消しますといったというのですね。冗談かと思ったら、まじめな顔をしていった。あきれて、その印刷機の代金はどうやって払うんだいと聞いたら、ちょっと先にもってきてもらって印刷して、そのお金で払えばいいといったという。

これはジョークなのですが、この話はなかなか笑えない本質的な問題を含んでいます。お金ってなぜ通用するんだろう。国内では通用するけど、外国に通用しないお金ってなんだろう。どこが違うんだろう。こういう本質的な問題を含んだジョークではあります。そちらのほうの話は皆さん金融論というので一年かけて勉強なさっていると思いますので、今日はそういう話ではなくて、現金の話を初めにしたいと思います。

現に皆さんの財布の中に入っている一万円札、五千円札、これがなぜ通用するのかなんて考えたこともない。これが本当に通用するのだろうか、大丈夫かなんて心配したこともない。ごく当たり前のことで経済の中を流れている。それが現金なのです。ところが、いったん何かおかしなことがあると、これは大変なことになる。

私は日本銀行の理事を四年間ほどしていたのですが、その時に発券局というお金を発行している部局の担当もしておりました。日本銀行というのは皆さん想像される通り固いところです。固い日本銀行の中でもお金を取り扱っている発券局はさらにコチコチに固いところでして、あらゆる段階ですべて二重チェック。そういうところですから、ふだんは局長のところにも話がめったに上がってこない。まして理事のところにはふだんの話は全く上がってこない。担当とはいっても比較的気楽な身分だったのですが、目の色が変わったことが三度ありました。

第一回は阪神・淡路大震災の時です。六時少し前にグラッと地震がありました。そのとき日本銀行の神戸支店長は何を思ったかというと、大変だ、九時に店が開けられるか、お金が払えるかということを心配して、自分の家の中がぐちゃぐちゃになっているのをほったらかして、ともかく銀行に駆けつけた。何人かの人が駆けつけて、九時にお金が出せるように万全の態勢をとろうとした。

災害が起こった時にライフラインという言葉をご存じですね。大災害が起こると真っ先に必要なのが水、食料、エネルギー、薬です。これはまさに命綱でありまして、災害が起こった時に真っ先にこういうものが不足なく提供できるように確保しなければいけない。これは災害対策の常道です。それほど緊急ではありませんが、二〜三日遅れて必要なのがお金です。ちょっと落ち着くと、次は必要なものをお金で買わなくてはいけない。お金がなければどうしようもない。銀行に預金してあっても手元にお金がなければどうにも動きがとれないわけで、現金を円滑に供給するというのが第二のライフラインなのです。

これはノウハウがありまして、三つのことをやる。一つは、ともかくお金がなければどうしようもありませんから、日本銀行から必要なところにお金が供給できるように、まず日本銀行自身がちゃんとお金が出せなければいけない。神戸の場合ですと大阪支店というのがありまして、西日本で必要な程度のお金は大阪支店の大きな金庫の中に確保されています。交通事情が悪くてもなんであっても神戸にお金が足りなくならないように大量のお金を車で運ぶ、その輸送を確保することがまず第一に必要です。それがなければ、その先のことができません。

第二は、皆さん預金通帳も判こもどこへいったかわからない。焼けてしまったかもしれない。預金通帳や判こがなくても本人であることが確認できれば銀行がお金が払えるように、そういう法令上の手当をするというのが二番目の措置です。

三番目は、預金のある銀行の店がつぶれて機能してなけ

ればどうにもなりません。あの時には各銀行の店がけっこうつぶれていて何日も開けませんでした。建物が倒れてしまったところもあります。さくら銀行なら一つの支店がだめでもほかの支店がありますからお金が払えるのですが、兵庫県に一つしか店がないという銀行もありました。第一勧銀とか商工中金とか六つか七つありましたが、そのたった一つの店がつぶれてしまうとどうしようもないわけです。それは日本銀行の建物の中で模擬店みたいな小さな屋台みたいなスペースを確保してあげて、そこの銀行の支払いができるようにする。そういう三つの緊急対策をとってお金を供給しました。これが円滑にできるかできないか。もしできなければ大変な混乱を招くし、下手すれば人命にもかかわるかもしれないということで目の色が変わった第一回であります。

二回目は同じ年、九五年の夏の終わりからですが、東京のコスモ信用組合、大阪の木津信用組合、兵庫銀行、この三つの金融機関が破綻しました。東京ではそれほどではなかったのですが、大阪では自分の預金が大丈夫だろうかというので取り付け騒ぎが起こり、店の周りにワーッと人だかりがして、お金が引き出されました。その時に万が一にでも、もうちは現金がありません、今日はこれで終わりですといったら、その銀行はおしまいなのです。どうせつぶれているじゃないかといわれるかもしれませんが、一つでもそういうことが起こると、ほかの銀行に取り付け騒ぎがいきます。用意してないところに取り付け騒ぎがくれば、その銀行だってそんなにお金を用意していません。大変な混乱になります。預金を引き出す人がある限り、その銀行にお金が絶えないように供給しておかなければいけない。これは大変なことです。

もう一回はそれから二年後の九七年一一月、山一証券が倒れて、あの時は何十もの銀行で取り付け騒ぎに近いような状態が起こりました。この時も鉄道やトラックをフルに利用して各金融機関にどうやってお金を回していくか。お金の量はあるのですが、輸送が続くかどうか。限られた輸送力で、どこにいつどれだけ入れたらいいか。ひとつ対応を間違えると、混乱している日本の経済、金融に決定的な打撃を与えてしまうということで、まさにこの三回、目の色が変わりました。

そのように現金というのはいろんな面がありますが、今日は初めてのお金という話から始めたいと思います。我が国最初のお金は何か。皆さん方が中学、高校の時代には、和同開珎が日本で初めてのお金だと教わったと思います。

三年ほど前に飛鳥の遺跡から、富本銭というお金が発見されました。和同開珎は七〇八年ということになっていま

すが、それより二五年ほど前の六八三年に富本銭というのが鋳造されていたことがわかりました。鋳造した鋳型が出てきました。一つ二つ作ったのではなくて、かなり大量に鋳造された。これで歴史が変わるのではないかという議論がされていますが、まだ決着がついていません。

飛鳥のもう少し前に、無文銀銭というのも見つかっていまして、これは何も刻印されてない丸い銀のメダルみたいなものですが、これももっと古いお金かもしれない。

青森に三内丸山遺跡というのがありますね。すでに縄文時代に貨幣経済があった。お金を媒体にして物が取引きされていた根拠となるものがあそこでいっぱい見つかっています。そのころのお金は何かというと、矢じりであったり貝であったりお米であったり布であったり、いろいろです。お金の始まりというのはなんだかわからないけど、そういうものを媒体としてみんなが取引きするようになったというのが最初のお金だった。

何が初めのお金かというのはなかなか難しいのですが、政府が大々的に権力をもって鋳造して、国民にその使用を奨励ないし義務づけた。そういう意味では和同開珎が最初のお金といっていいのではないかと思います。

以上が最初のお金ですが、その次は紙のお金です。最初の紙のお金は何か。一番古いのは中国の四川省で一〇世紀半ばに交子という鉄のお金の預かり証みたいなものを発行した。これが世界最古の紙幣です。中国にはかないません。

その次は日本の山田羽書です。伊勢山田地方に御師という伊勢神宮下宮の神官であると同時に豪商でもあるのですが、その商人が発行した銀の預かり証です。この羽書と引き換えに銀を渡すという交換文言が入っています。これは兌換紙幣と同じことです。発行者の名前と判こが押してあって、その人の宗教的権威と経済的信用とでこれが銀として通用した。それが伊勢の山田にあったので、山田羽書といっております。これは関が原の合戦のあった西暦一六〇〇年ごろのもので、ヨーロッパより古く、日本ではこういう紙のお金が出ていた。日本の文明というのは世界に先駆けて独自に発達した部分が非常に多いのです。

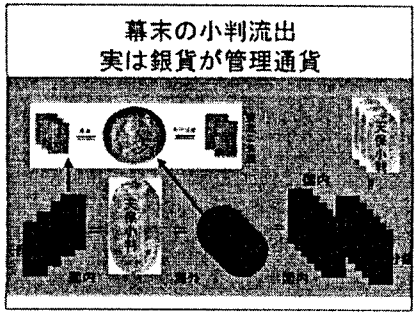
その次は幕末の金貨流出の話です。幕末に日本から金が大量に流出しました。ひと口でいえば、外国人にカモられたわけです。教科書にはどう書いてあるかというと、日本では金一gに対して銀が五gだった。それに対して海外では金一gに対して銀が一五gだった。金と銀の交換比率が日本と外国で違ったために金が流出したと教科書には書いてあるのですが、話はそう単純なことではなくて、外人のあくどさと幕府の役人の愚かさが重なったような話です。

日本では金と銀が同時に流通していました。金は天保小

判、銀は天保一分銀というのが並行流通していました。一分というのは一両の四分の一という単位です。小判一枚は天保一分銀四枚です。日米の金同士はどうなっているかというと、実際にはほとんど通用してないのですが、二〇ドル金貨が日本の五両と金の重量がほぼ一致していた。ということは四ドルが一両ですから、一ドルは一分になる。

一方、銀の方は一ドルとして非常によく使われていたのがメキシコ洋銀というもので、銀の重さでいうとメキシコ洋銀は二七gある。それに対して天保一分銀は八・七gしかない。銀の重さが違うのです。これは、天保一分銀というのは、実は素材の銀の価値よりも高い価値で通用させていた管理通貨だったのです。金との交換レートからいくと、この一ドルは一分と対等なはずなのですが、この時に幕府は大変なチョンボをやって、銀も同じ重量で交換しますという取り決めをさせられてしまった。同じ重量で交換するということになると、メキシコ洋銀一枚が天保一分銀三枚ですから、四枚なら天保一分銀が一二枚もらえる。本来は一ドルが一分であるはずが、一ドルが三分になってしまった。

四ドルが一両というのは海外でも同じですから、メキシコ洋銀が四枚あると小判一枚と等しい。どういうことが起こるかというと、まずメキシコ洋銀を持ち込みます。四枚持ち込むと一二枚の天保一分銀がもらえる。これを日本国内で小判に替える。天保一分銀一二枚というのは小判だと三枚になる。小判三枚を外国へもっていくと、一枚でメキシコ洋銀が四枚ですから、一二枚になる。つまり、メキシコ洋銀四枚が一廻りすると、一二枚に増えるという訳です。実際には運ぶコストなどがありますから完全に三倍になるわけではないのですが、そのコストを差し引いても、ぬれ手にアワでお金が儲かる仕掛けになっている。その結果、日本にはメキシコ洋銀はどんどん入ってくるけど、かわりに金がどんどん流出する。



結局、一年足らずの間に五〇万両、日本の金の流通の二%が海外に流出しました。幕府はこれはいかんというのでずいぶん交渉するのですが、天保一分銀が管理通貨だという理屈を相手に説明できなかった。仕方がなくて幕府は金貨の質をドーンと落とします。金貨の質を落とすことによって金の流通を止めるのですが、その結果、幕末にかけて猛烈

なインフレになって、それで明治維新を迎えるという歴史が一つあります。

以上、初めてのお金の話をしましたが、今度は今のお金の話をしようと思います。現代日本の現金について結論だけ先に申し上げますと、日本で発行されているお金は実額で世界一です。ドルを超えて世界一の量が出ています。キャッシュレス化がどんどん進んでいるからお金はあまりいらないと常識的には思うのですが、日本の場合は逆で、経済規模に対してお金の規模は増えています。特にここ数年の動きが異常です。外国と比べると圧倒的に日本人は現金が好きです。

どこに五〇兆円のお金があるのだろうか、関心があるので私もいろいろ勉強したんですが、よくわからないというのが結論です。一つ一つ申し上げます。

日本銀行券の発行推移は、どんどん増えてきています。去年の一二月末残で六三兆四千億ほどです。年間平残で五四兆八千億ほどです。

末残で見ると、九六年の段階で四、三六八億ドル。アメリカが四、二六五億ドルですから、九五年末からアメリカを抜いて世界一になっています。アメリカは経済規模が倍あるわけですが、それにもかかわらず日本の円のほうがたくさん出ているということです。しかもアメリカのドルはアメリカ国内で通用しているのは半分で、あとの半分は外国で通用しています。東南アジアを旅行すると、ドルがそのまま通用してますね。日本の円は六三兆と申し上げましたが、ほとんど国内で通用している。それに対してアメリカは半分国外で通用していて日本の額より少ないのですから、実力からいうとかなり少ないということがいえます。

歴史的にみてGNPとの関係がどうかというと、大正年間が六・五～七・五%、昭和のひとけたで七%後半ぐらい、戦中戦後の混乱の時を除いて、昭和三五年ぐらいまで少し落ちてきて、高度成長期の三五年から昭和の終わりにかけて七%ぐらいまで上がって、平成に入ってからGNP比が一〇%位まで急速に上がります。初めのうちはバブルで上がりました。バブルというのは土地の取引、株の取引が活発になってどんどん値段が上がっていくわけです。ああいうものは現金で取引しますから、経済規模に対して余計お金が出ていくということで、それはわかります。

ところがバブルがはじけて土地の値段も株の値段も大幅に下がる。取引も縮む。その段階でもなお、お金は増え続けた。これは非常に不思議なのですが、後半は金融不安なんです。もう一つは低金利。こんな金利では銀行にお金を預けていてもしょうがない、銀行が心配だということで現金が増えていった。

山一がつぶれたころですが、北海道で熊平の金庫が飛ぶように売れて在庫がなくなったというエピソードがどこかに出ていました。これは複数の人から聞いた話ですが、銀行に定期預金をおろしに行った。そうすると銀行では聞きますね、何にお使いになるのですかと。お客さんがなんといったかというと、お前のところの貸金庫に入れるんだよ。どうせそこの銀行に入れるんなら預金しておけばよさそうなものですが、預金だとつぶれた時に取れなくなるかもしれない。家に置くと心配だから貸金庫に入れる。そういう嫌みをいって引き出したお客さんがいっぱいいたという話です。

外国と比較して、経済規模とお金とがどのくらいの関係にあるかというと、日本は一〇%です。先進国はみんな低いです。アメリカは五・六となっていますが、国内には半分しかない。日本は四倍近くお金が出回っている。ドイツマルクも国外で通用していますから、ちょっと高くなっています。発展途上国になるとみんな銀行を信用しませんからお金で持っているケースが多い。インドで一一%、中国で一五%ということで、日本はインド、中国並みかというのもよくわかりません。

お金の額面ごとにどのくらいの枚数が出ているか。全体の枚数に対して何%が千円札で何%が一万円札かというと、二千円札が出る前ですが、千円札が全体の枚数の四〇%、一万円札が五五%ですから、最高額面のお金が枚数でも五五%という高いシェアで出ています。五千円札はあまり出ていません。

換算して一万円に近いのはアメリカでは一〇〇ドル、ドイツでは二〇〇マルクです。日本の一万円に相当するようなお金はアメリカだと一五%、ドイツで七・六、英国で四・七、フランスで二〇%です。一枚で巨額なお金はみんな持って歩かない。アメリカで断然多いのは一ドルなのです。

なぜ日本人は現金が好きなんだろう、しかも高い現金を安心して使っているのだろうかということを考えてみますと、一つは非常に平和で安全だからだと思います。もう一つは、災害の時でなくても日本銀行がふだんから現金の供給に行き届いたサービスをしているということがあります。お金に対する信用があるということですが、印刷技術が優れていて偽造が少ない。ドルは非常に偽造が多い。

銀行から返ってきたお金に偽物が混ざっていないかどうか日本銀行でチェックします。これで見つかる偽物は一〇億枚に一枚とか二枚、一桁です。アメリカのニューヨークの連邦準備銀行などでは一〇万枚に何枚という割合で偽造が見つかります。偽造の混ざっている割合が四桁違うんですね。日本は非常に偽造が少ない、印刷技術が優れている

ということがあります。

これはよくわからないのですが、私たちが思っているよりもアングラ経済が多いのかなという気もします。麻薬の密売というのは日本ではそんなにないと思いますが、競馬のノミ行為というのがありますね。暴力団関係もあるでしょう。ヤミの政治資金みたいなものもあるかもしれない。お賽銭というのもあるかもしれない。アングラ経済というのは現金で動く経済ですから、証拠の残る銀行振込みはしません。しかし、あの悪名高いイタリアよりも日本のほうがアングラ経済が多いとも思えません。ということになると最後は国民性です。お金で持っていると安心だ。それは平和と安全ということとも関係があるかもしれません。

九八年末は六〇兆円として、どこにいくらあるかというのをやってみました。わかるところから追ってみると、金融機関がいくら持っているかというのはわかります。七兆円というのは統計でわかります。海外はどう多く見ても一兆円というのは、出たり入ったりするお金をある程度押さえていますからわかります。

家計がどのくらいの現金を持っているかというのは、平成八年に貯蓄に関する世論調査というのを日本銀行がやったことがありまして、一世帯当たり二八万円という数字が出ています。ちょっと少ないような気もします。これを平成一〇年末まで延ばしてみると三五・七万円。しかしこれは四、三四五万という非常に数多い世帯ですから、お金持ちだけではなくて、その日暮らしという世帯も入っているわけです。平均して三五・七万円というのはそうおかしな数字でもないのかなということで、掛け算をしますと一五・五兆円にしかならない。

あとは法人企業ですが、法人企業は利息のつかないお金をそんなに持っているはずはないので、過去の統計で推測しますと、個人のお金との関係で計算して八・五兆円と推計します。大ざっぱにそうやって積み上げると、二八兆円が行方不明、半分近く行方不明なのです。どこにあるのかわからない。

ちょっとヒントになったのが阪神・淡路大震災の時なのです。先ほどお金はライフラインだ、お金に対して緊急対策を三つとるということを申し上げましたが、そのほかにもう一つ大事な仕事があります。それは、半分焼けたり水びたしになってくしゃくしゃになったお

金を新しいお金に替えてあげる。これは大事なことです。

焼けたお金は缶を開けないで、缶のままもってきてください、缶を開けると空気が入って真っ白になって見えなくなります、缶カラのまま水をかけてもってきてくださいというのをテレビ、ラジオで宣伝しました。そうしたら二千件の引き換えがありました。二千件ですが、これがなんと一〇億円、一件五〇万円ですね。大した金額です。その中には大口がありました。相当年配のご婦人が缶カラをもってこられて、「ほんの三千万ほどだと思いますけど」とおっしゃって、本当に三千万あったという話があります。

七件、三億円ほど大口を除いたのですが、それでも一件平均三五万円でした。一件平均三五万円ということは、あるところにはあるんだなという気がします。私の粗っぽい推測では、二八兆円のうちの半分が個人のたんす預金、残りがアングラマネーかなという気がします。

今度は異常な時のお金の話をしようと思います。一つはインフレの時のお金です。第一次大戦の後のドイツが大変なインフレでした。卸売物価が一九二三年には戦前の一兆二、六〇〇億倍になった。その時に出たお金で帝国銀行一〇〇兆マルク券というのがあります。

第二次世界大戦後のハンガリーというのはインフレの世界記録をもっていまして、四×一〇の二九乗というすごいインフレだったのですが、このお札は一〇垓（ガイ）ペンゴ。兆の上が京で、京の上が垓です。一〇垓というのは一×一〇の二一乗、一の向こうにゼロが二一つくということです。最近の話では、一九九三年にユーゴスラビアで五千億ディナールというお金が出てますが、当時駐在した人の実感だと、二〇〇～三〇〇円の価値だそうです。

もう一つ有名な異常なお金は、昭和恐慌の時に出た裏白二〇〇円札というものです。昭和二年に金融恐慌が本当に起こって取り付け騒ぎが起こり、物理的にお金が足りなくなったのです。物理的にお金が足りなくなったので、大あわてで政府がひと晩でお札を刷ったそうです。ものすごくちゃちな印刷で、しかも当時二〇〇円というのは最高額面です。裏を刷っている暇がなくて裏が白い。片面印刷です。こういうものを発行しました。最近二千円札が出ましたが、あれが定着しません。日本人は二というお金はあまりなじみがない、なんとなく好きじゃないというのは、ひょっとしたらこの時の印象があるのかなと思っています。

これは実際には発行されなかったんですが、戦争末期に金属がなくなってしまいました。金属を供出した思い出のある方もおられるかもしれませんが、金属がなくなってしまって、とうとうお金にする金属がなくなりました。そこで、粘土と長石を混ぜて陶貨を作ろうというので、実際に

作りました。一銭、五銭、一〇銭のお金を作りましたが、終戦になったために発行されずに終わりました。

以上、異常なお金の話をしましたが、現金というのは異常でなければ呼吸や脈拍のように気にしないで自然に動いているものです。お金が意識されるような異常事態を招かないということが中央銀行の仕事で、日本銀行はそれをやっているのです。新しい日本銀行法の一条・二条にも、物価の安定と金融システムの安定を中央銀行の使命とする、中央銀行はそのために努力しなくてはいけないということが書いてあります。

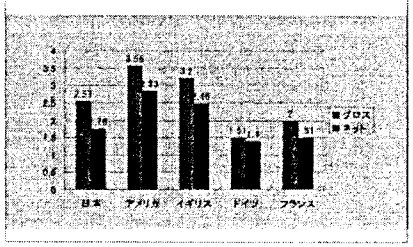
話がちょっと変わりますが、日本は世界に冠たる一、四〇〇兆の個人貯蓄がある。日本経済は悪いというけど、これだけの個人貯蓄があるんだから大丈夫だといってます。本当にそうでしょうか。一、四〇〇兆円に及ぶ個人貯蓄というのは本当に世界に冠たる心強い備えだろうか。確かに一、四〇〇兆あります。しかし絶対額ではアメリカのほうが多いのです。GDP比でもアメリカ、イギリスに負けています。大きな額ではありますが、世界に冠たるというのはやや言いすぎではないか。しかも圧倒的にそれを預金、貯金という形で日本人は持っています。

まず個人金融資産。これは現金もありますが、預金、郵便貯金、株式、債券、そういったものの全部です。家や車といった実物資産ではない、帳面についていたり紙であったりする資産です。この金融資産の残高が一、四〇〇兆円ぐらいになっています。

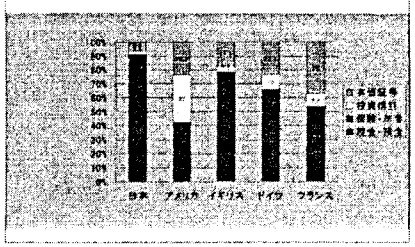
グロス、ネットというのをご説明しておきますと、個人は一方で預金してお金を持ってますが、一方ではローンで借りてる分があります。それを差し引いてネットでどれだけか。資産超過の分をネットと表しています。借金はいくらあろうと、持っているものを積み上げたのがグロスです。

アメリカは貯金していないみたいにいっていますが、あれは現在、稼いでいるよりも使っているほうが多いということで、過去の蓄積はしっかりあるんです。日本よりもだ

個人金融資産のGDP比（倍）



個人金融資産構成の国際比較



いぶ経済規模に対して個人の金融資産は多い。

個人金融資産がどこにあるかというと、第一義的に日本では圧倒的に預貯金です。六三％が預貯金です。対照的なのはアメリカです。預貯金の割合は一五・五％しかない。イギリスでも二〇％しかない。ドイツ、フランスはそれよりは多いけど、日本よりはだいぶ少ない。先進国では預貯金以外のところに個人の金融資産がある。アメリカでは株とか投資信託が圧倒的に多い。イギリスでは保険、年金という形が多い。それにしても日本は株や投資信託のシェアが少ない。日本の個人の金融資産は銀行や郵便局を通じて運用されているということになります。

それが回り回って最終的にどこへどういってるのかという点が次の話です。一番新しい数字で見ますと、家計等の個人金融資産は約一、四〇〇兆あります。このうち自分が借りている分が四〇〇兆ありますから、ネットでは一、〇一五兆です。この一、〇一五兆が何に化けているかを見ますと、一つは企業にいっています。今の企業はお金が余っています。毎年の金繰りでいうと、企業は工場を建てたり原材料を買ったりするお金を自分の収入と減価償却で賄っていて、銀行にはネットでお金を返しています。しかし過去の借金がありますから、残高としては依然として民間の非金融法人企業が最大の借り手です。

もう一つは政府です。一、〇〇〇兆のうち三八七兆は政府に回っていることになっています。詳しく見てみると、国なり都道府県が借りているのがネットで四四〇兆ぐらいある。一方で年金の積立てが二〇〇兆ほどあります。この統計ではこれを政府の借金と相殺しています。しかし、皆さんの年金を払うには二〇〇兆では全然足りないんです。将来、どこからかお金を集めてこない限り年金は払えない。積立て不足なので、それを考えると、国のほかの借金から二〇〇兆を差し引くというのは問題なのです。

さらに問題なのは、四四〇兆円というのも、政府が

1400兆円の行方
純資産の半分は公共と海外へ

- 家計等金融資産残高　1429.3兆円
- 同　金融負債残高　414.1兆円
- 差引家計等金融純資産1015.2兆円
- 民間非金融法人企業　−889.3兆円
- 公共部門（非金融）　−387.3兆円
- 海外　−84.7兆円
- 金融機関　56.0兆円

公共部門の純債務とは結局将来の納税者が負担する純債務

- 将来の国民負担の実力をみるためにはもう少し詳しく内訳を見る必要
- 公共部門純債務−387.3兆円の内訳
  - 一般政府（中央）　−378.3兆円
  - 一般政府（地方）　−61.2兆円
  - 小計　−439.5兆円
  - 社会保障基金　213.7兆円
  - 公的非金融企業　−161.4兆円

持ってる資産を相殺した数字です。しかしこれが何かというと、第三セクターの出資金だったりする。田舎のほうの鉄道とか、どこかでつぶれたリゾートみたいな話がいっぱい出ていますが、ああいうところに対する貸付金だったり出資金だったり、そういうものも全部資産としてカウントされています。これは不当です。また、道路公団とか金融機関でない国の企業がありますが、これが一六〇兆ほど借りています。これは料金で返すことを期待したいが、こうした政府企業の赤字も最終的には国民がかなり負担しなくてはいけない。

結論を申し上げますと、政府部門の本当の借金というのは六〇〇兆円を上回る。政府の借金を返すもとは納税者の税金しかないわけです。納税者の税金というのは回り回って家計の税金です。個人資産は一、四〇〇兆、自分が借りた分を除いて一、〇〇〇兆あるというけど、六〇〇兆は自分に貸している。自分が国なり公共団体に税金を納めて、将来、その税金で返してもらわない限りは戻ってこないのが六〇〇兆です。

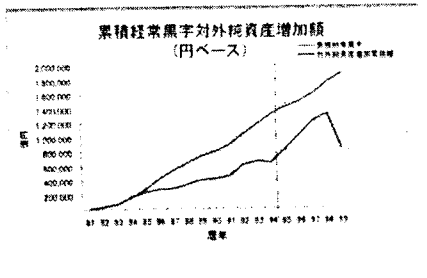
いかに日本の政府の借金が多いか、悪くなっていったか。一九九一年、バブルがはじける直前には日本は主要七カ国の中で真ん中でした。これは借金の残高のGDPに対する比率です。日本は五八・二%、アメリカよりよかったのです。イギリスやドイツよりは悪かったけど、アメリカよりよかった。それが九四年にはびりから三位になります。アメリカに逆転されたのです。九八年になるとカナダにも逆転されて、九七・三までいきます。とうとう二〇〇〇年には一一四・一とイタリア並みで、ほとんど同率びり。これは数字の取り方に問題がありまして、現実にはイタリアに負けて、一三〇%位と今やびりになっているというのが実力です。

海外への貯金は八〇何兆で大した額ではないのですが、確かに海外に貯金しています。対外純資産です。日本は昭和四三年以来、オイルショックの一時期を除いて三三年間、国際収支の黒字を続けています。国際収支の黒字というのはどういうことかというと、国全体として稼いだほうが払った額より多いということですから、それだけ海外に資産が蓄積します。だから国際収支の黒字の累計分だけ海外に資産がたまってなくてはいけない。ただし、向こうの株が上がったり下がったり、向こうの土地の値段が上がったり下がったりしますから、多少の差は出ても仕方ないのですが、現在の対外純資産は稼いだはずの黒字累計のわずか四三・八%にとどまっています。

特に九九年が悪いのです。これは円建てで評価していますから、円がどんどん上がっているせいもあります。黒字

をためて、それを外国へ投資していた時はドルで投資している。アメリカの国債を買っている。一億ドル買って二四〇億円だと思っていたら、それが一二〇億円になったということですから、そういう目減りはあります。

経常黒字はどこへ消えたのでしょうか。今のを数字で表してみます。経常黒字の累計が一八七兆あるのに、対外資産は八二兆しか増えてない。特に九九年は一二兆の経常黒字がありながら純資産は四八・五兆減少した。差し引きで六〇兆円行方不明になっている。稼いでも稼いでも目減りする。ドル建てで見ても似たようなものですから、円高だけでは説明がつかない。一つはバブル時代に浮かれて海外に相当投資をして、それがパーになったというのがけっこうあります。それが九九年に大きく統計に出てきたということもあると思います。



もう一つは、日本人の資産を運用している日本の金融機関が儲け方が下手で、外人のお金を持って日本で運用しているほうがグッと伸びている。これは日本から見ると負債になっている。株価は九九年一年間で三割上がっているのですが、外人の持っている株は倍になってるという統計がある。外人の株を扱っている外国の証券会社のほうが儲けがうまい。結局、本邦金融機関の競争力の弱さを示している。これではなんのために製造業が営々と稼いで黒字をためてきたのか。国民はなんらかの形で、貯金を日本の金融機関に任せているわけですが、それが目減っている。これでは困る。

高齢化社会に対して力強い備えとなるためには、最大の借り手は本邦企業ですから、企業の収益力が向上することは当然。政府の財政体質が改善して、将来の国民の負担が六〇〇兆からできるだけ軽くなるようにしていかなければならない。そういう当然なことに加えて、国民の富を目減らせないように、本邦金融機関の競争力をつけていくことが大事なことです、ということで、話を終わりたいと思います。